



TITLE:

支那金石學概要[二] 石刻 馬衡著

AUTHOR(S):

水野, 清一

---

CITATION:

水野, 清一. 支那金石學概要[二] 石刻 馬衡著. 東洋史研究 1937, 3(2): 117-132

ISSUE DATE:

1937-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145600>

RIGHT:

# 支那金石學概要 石刻

馬衡 著  
小川茂樹 譯註

第一、刻石と碑の別  
第二、造像と畫像の別（前號所載）

第三、經典諸刻と記事諸刻の別（後半以下次號）  
第四、一切建築物附刻の文

紀事刻石とは當時の事件の記録を石に刻して表章したものである。經典刻石とは古人の著作を石に刻して流傳せしむるものである。刻石の發明當初は幾んど紀事の文章のみであつたが、熹平石經に至つて始めて經典の刻が現れた。故に世に傳へる刻石は經典少く紀事が多いのである。左に分類列舉する。「太學石經」「釋道石經」「醫方」「格言」「書目」は經典の類であり、「事蹟を表章する文」「文書」「墓誌墓簡」「譜系」「地圖界至」「題詠・題名」は紀事の類である。

太學石經 後漢の熹平年間 西曆一七二—一七七 五經の文字

の亂雜訛誤が日に多くなつたので、儒者に詔して正定し、石に刻して太學に立て、<sup>①</sup>後來の學者に據るべき標準を示した。是即ち熹平石經であつて、其の目的とす

る處は、展轉寫錄されて從ふべき標準の無かつた經書の爲に、特に此の定本を作り、至善に法らしめんとしたのである。<sup>②</sup>其後之を模倣したものに、魏の正始石經唐の開成石經、後蜀の廣政石經、北宋の嘉祐石經、南宋の高宗御書石經、清の乾隆石經がある。

漢石經は後漢靈帝の熹平四年（後漢書靈帝紀は熹平四年春三月の事とするが、水經注は光和六年と云ふ。<sup>③</sup>

洪适は「諸儒詔を受くるは熹平に在るも、碑成るは光和の年なり」と云つてゐる。<sup>④</sup>に立てられ、蔡邕の書で

（蔡邕傳に「邕自ら丹を碑に書し、工をして鐫刻せしむ」とある。<sup>⑤</sup>『隸釋』に著錄する殘字の後に堂谿典馬

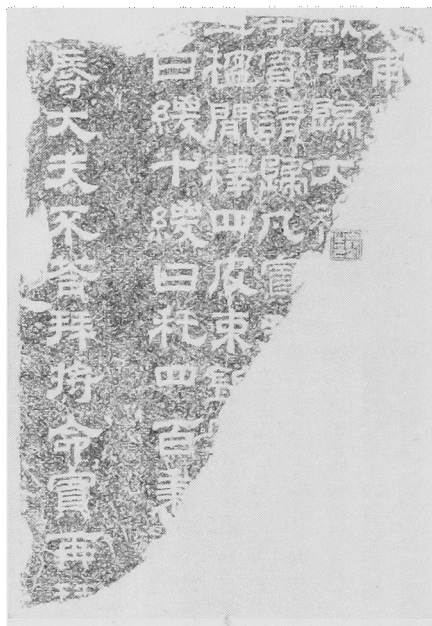
日碑の姓名があるので、洪适は「今存する所の諸經字體各々同じからず、其間必らず同時揮毫する者あら

ん」と云ふ。石の表裏に刻してある。其の字體は『後漢書』儒林傳序は古文・篆・隸の三體書法だとする。<sup>⑧</sup>酈道元の『水經注』(穀水篇)は三字のものを魏に屬せしめる。<sup>⑨</sup>宋の洪适の『隸釋』(隸續)を著するや、一字石經を録し、其の上に堂谿典・馬日磳等の名がある事から、酈氏の説に據り、後漢書の誤を正し、之を辨ずること最も詳細である。<sup>⑩</sup>是に於て一字石經は漢の刻なりとの論が始めて決定された。其の經數は或は五經(靈帝紀・盧植傳・儒林傳序・宦者傳)<sup>⑪</sup>、或は六經(蔡邕傳・儒林張馴傳)<sup>⑫</sup>、或は七經(隋書經籍志)<sup>⑬</sup>とも云はれる。近頃王國維が『魏石經考』を著し、傍ら漢の經數を考證し『周易・尚書・魯詩・儀禮・春秋』の五經と、『公羊・論語』の二傳と定めた。他經の専門家が兼習し、特に博士を置かぬ『論語』を除き、其餘は皆各々學官に立てられ、専門の博士を置いて教授してゐるものだ。だから先儒の紀載が五・六・七經とまち／＼になつてゐるのである。其の石數は『西征記』(太平御覽文部所引)には四十枚と云ひ、『洛陽記』(蔡邕傳注所引)に四十六枚とあり、『洛陽伽藍記』には四十八碑と稱する。王國維は又表裏の字數より推算し『洛陽記』の擧げた

數が最も確かと考へた。其の碑の行數、毎行の字數は詳かでない。たゞ『隸釋』に載せられた殘字と最近出土の殘石によつて計ると毎行約七十字乃至七十三字である。石を立てた場所は太學であつて、今の洛陽城の東南三十里、洛水の南岸の朱圻埧村に當り、『洛陽伽藍記』に記する所の勸學里である。漢より北魏に至る迄は殘毀しながらも石は皆洛陽に存在し遷された事がなかつた。東魏武定四年<sup>西曆五</sup>六四に至つて洛陽より鄴都に徙さんとして河陽迄來て岸の崩壞に逢つて水中に没し、鄴に到着したものは大半に達しなかつた(『隋書經籍志』に見える。<sup>⑭</sup>然し『北齊書』文宣帝紀に據ると天保元年<sup>西曆五</sup>五〇に尙は五十二枚存したと云ふ)。周の大象元年<sup>西曆五</sup>七九鄴より洛陽に遷され(『周書』宣帝紀による)、隋の開皇六年<sup>西曆五</sup>八六又洛陽より長安に運ばれた(『隋書』劉焯傳による)。<sup>⑮</sup>次いで隋末の亂に逢ひ、建築の官が之を柱の礎石として使用し、唐の貞觀の初年に魏徵が之を聚集したが、已に十分の一しか存しなかつた(『隋書經籍志』による)。<sup>⑯</sup>此の展轉遷徙によつて、石經の蹤跡は遂に究め得なくなつた。宋の南渡以後に至つて殘存した石經の經と文字は最早多くない。洪适

が搜集した拓本も僅に『尙書』（盤庚・高宗彤日・牧誓・洪範・多士・無逸・君奭・多方・立政・顧命諸篇）の五百四十七字、『魯詩』（魏風・唐風諸篇）の百七十三字、『儀禮』（大射儀・聘禮・士虞禮諸篇）の百一字、『公羊傳』（隱公四年より桓公元年に至る迄）の三百七十五字、『論語』（前四篇と後四篇）の九百七十一字、合せて二千百六十七字に過ぎぬ。今『隸釋』『隸續』に載せるものは是に外ならぬ。石經の重刻は宋代に二本出来た。一は胡宗愈（顧炎武の『金石文字記』朱彝尊の『經義攷』共に胡氏の

記と宇文紹奕の跋を引いてゐて、顧炎武は胡氏を以つて胡宗愈とし、朱彝尊は胡元質とする。按ずるに胡宗愈は哲宗の時成都府知たり、宇文紹奕は孝宗の時邛州太守であつた事がある。胡元質は孝宗・光宗時代の人



第六圖 (Fig. 6) 漢熹平石經儀禮殘石  
— 福井市博物館蔵 —

で宇文紹奕と同時代ではあるが、蜀地方に居たことを聞かぬから、顧炎武の説が正しい。の成都西樓刻本で宇文紹奕の跋によると四千二百七十字、楷書の釋文がある。一は洪适の會稽の蓬萊閣刻本で、洪氏自身の跋

には、『尙書』『儀禮』『公羊』『論語』千九百餘字、（『隸釋』の所録には尙ほ『魯詩』があるが、覆刻本には無い。）である。今は兩本共に亡佚した。清朝の翁方綱は諸家所藏の舊拓本を集め『尙書』（盤庚・洪範・君奭諸篇）、『詩』（魏風・唐風諸篇）、『儀禮』（大射儀・聘禮諸篇）、『公羊』（隱公

四年傳）、『論語』（爲政・微子・堯曰諸篇と篇末の識語、合せて六百七十五字を南昌府學に刻した。その大半は錢泳の藏本に基づく。錢泳は偽物を作るのに巧みであり、此本の『公羊』の殘字で洪适に未著錄の者



があるのから見ると、此の本は錢氏の偽造らしい。<sup>27)</sup> 翁方綱は此の錢氏の僞本に據つて摹刻したのだから、嚴密な復原とは云へぬ。最近に洛陽の朱屹嶠村から出た殘石は大抵斷片にして文を成さず、字數多きもので十餘字、少い者は僅に一二字であるが、五經・二傳皆存在する。自分の見得た者に就て云へば『易』三字、『詩』七十三字、『禮』三十三字、『春秋』百五十八字、『公羊』二字、『論語』三十四字、何經か判らぬもの二十七字、合計三百二十七字あり。その外『石經後記』一石百五十餘字とその破片二十七字がある。<sup>28)</sup> 後記中には光祿勳劉寬、五官中郎將堂谿典の名がある。劉寬が石經建設に干與したことは今迄の石經の記錄に見えぬ所である。<sup>29)</sup>『周易』『春秋』の二經に至つては宋代の人も目睹せぬ所である。

①『後漢書』卷八、漢靈帝紀に「熹平四年春三月、諸儒に詔して五經の文字を正定し、石に刻して太學門外に立てしむ」と云つてゐる。

②同卷五十、蔡邕傳に「邕經藉聖を去ること久遠にして文字の謬り多く、俗儒の穿鑿後學を疑誤せしむる以つて、……奏して六經文字を正定せしめんと求む。靈帝之を許す。邕乃ち自ら丹を碑に書し、工をして鐫刻し太學門外に立てし

む。是に於て後儒晚學咸く正をこゝに取る。」と述べてゐる。

③註①参照。

④『水經注』穀水注に「漢靈帝光和六年、石に刻し碑に鏤し五經を載せ太學講堂前に立つ」と云つてゐる。

⑤洪适『隸釋』卷十四石經論語殘碑の條下洪适の語。

⑥註②参照。

⑦『隸釋』卷十四石經公羊殘碑の本文に「上缺」谿典・諫議大夫臣馬日碑……とある。洪适は谿典は堂谿典に外ならずとする。同書石經論語殘碑條下に之を論據として本文に引く如き説を提出した。

⑧『後漢書』卷七十九、「靈帝即ち詔して五經を正定し、石碑に刊して古文・篆・隸三體書法を爲り、以つて相參檢し、之を學門に立つ」と云ふ。

⑨『水經注』に「魏の正始中又古篆隸三字石經を立つ」と云ふ。『晉書』衛恒傳も同じ。

⑩『隸釋』卷十四石經論語殘碑の條。

⑪後漢書靈帝紀註①参照。卷六十四盧植傳に「始め太學石經を立て、以て五經の文字を正す」とある。儒林傳は註⑧参照。卷七十八宦者呂強傳中に「呂強迺ち帝に白して、諸儒と與に五經文を石に刻せんとす」とある。

⑫蔡邕傳は註②参照。卷七十九上、張馴傳に「蔡邕と與に六經文字を奏定す」と云ふ。

⑬『隋書』卷三十二小學の類下に「後漢七經を鐫刻して石碑に著す」とある。

⑭以下本文の「毎行七十三字である。」に至る迄は、『學術叢編』に始めて載せられた『魏石經考』の内の漢石經經數石數考(後に『觀堂集林』卷二十所收の魏石經考一)の大意を抄したものである。

⑮戴延之『西征記』(『太平御覽』卷五八九所引)に「太學堂前石碑四十枚」と云ふ。

⑯後漢書卷六十一註所引『洛陽記』に「(太學)堂前石經四部あり。本碑凡そ四十六枚なり。……」とある。

⑰楊街之『洛陽伽藍記』卷三、報恩寺條に「開陽門外三里、開陽門御道の東に漢國子學堂有り、堂前に三種字石經有り。……また石碑四十八枚あり。」と云ふ。

⑱同書前引に續いて「高祖題して勸學里となす」とある。

⑲『隋書』卷三十二經籍一、小學の類の序に「後魏の末に齊の神武政を執る。洛陽より鄴都に徙す。行いて河陽に至る。岸の崩るゝに値ひ、遂に水に没す。其の鄴に至るを得るもの太半に盈たす」と云ふ。

⑳『北齊書』卷四、天保三年八月、……往に文襄皇帝建つる所の蔡邕石經五十二枚、即ち宜しく學館に移置し、次に依つて修立すべし」と。

㉑『周書』卷七、「大象元年二月辛卯、詔して鄴城の石經を洛陽に徙す」と。

㉒『隋書』卷七十五、「六年洛陽石經を運んで京師に至る」と。

㉓隋書註⑲所引の下に「ついで隋亂に屬し、……營造之司、因つて用ひて柱礎となす。貞觀の初、秘書監臣魏徵始めて之を收聚す。十に一を存せず」と。

㉔『隸釋』卷十四、石經尙書殘碑・石經魯詩殘碑・石經儀禮殘碑・石經公羊殘碑・石經論語殘碑・學師宋恩等題名の各條。『隸續』卷十五、石經儀禮殘碑の條。

㉕『金石文字記』(『顧亭林遺書』所收)卷一、石經の條に宋胡宗愈の重刻漢石經記を引き、『經義攷』卷二百八十九には「胡氏元質漢石經記重刻」とする。兩書又字文紹奕の跋を引いて「給事內翰胡公、旁搜博訪して諸家藏する所を合せ蔡中郎石經四千二百七十字有奇を得たり。楷書を以て之を釋す」と。

㉖『經義攷』卷二百八十九、宋洪适重刻漢石經の條。

㉗錢泳の跋は『金石萃編』卷十六漢石經條に載せられてゐる。是によると、公羊の十八字は洪适の書に未だ備らざる所であると云ふ。

㉘馬衡氏の此の新出漢石經に就ての記述は、その稿本編纂が尙ほ出土の初期に屬するが故に甚だ不完全である。漢石經の集成で最も信用し得る羅振玉の漢熹平石經殘字集錄(民國十九年石印)によると、周易十石六百四字、尙書十三石百二字校記十字、魯詩百二十一石千百四十字校記二十六石百五十九字、儀禮二十五石三百四十一字校記六字、春秋五十六石四百三十四字、公羊傳四十一石四百二十字校記一石二字、論語二十八石百九十一字校記二十七字、序說十六石三百四十九字、合計三百四十一石三千七百八十五字を数える。その後同補遺一卷(民國二十年)續補一卷(民國二十一年遼居雜著乙編)又續編一卷續十一卷(民國二十三年遼居雜著丙編)等が陸續出版され、其石數字数は更に多數とな

つた。石經は現在も日に出土し羅氏の集録に及ばなかった者も亦少くはない。然しその内には偽品も相當にあるので之が利用には慎重な注意を要する。張國淦氏の著『漢石經碑圖』一卷(民國二十年)は王國維の考證により、出土漢石經斷片を基とした漢石經四十八碑の復原であつて、甚だ便利であるが、無條件には信頼し難い。その完全な復原碑圖は尙將來の課題である。

②『熹平石經殘字集錄』の序記の部に此石が載せられ、「……與光祿勳劉寬五官中郎將堂谿(下缺)」とある。

魏石經は齊王芳の正始年間(西曆二四〇—二四九)に立てたもの

其の字體は古文・篆・隸の三體であり、經數は『尙書』『春秋』の二部であるとは『西征記』『洛陽伽藍記』『隋書』經籍志皆な一致し(『唐書』經籍志に『左傳』あつて『春秋經』が無いのは誤らしい)、表裏に各々一部宛刻した。石の數は『水經注』には四十八枚、『西征記』には三十五枚、『洛陽伽藍記』には二十五碑と云ふ。<sup>①</sup>今春秋字數を每碑の三十二行に排列すると、篇題をも加えて二十七碑になる。『尙書』の字數は『春秋』よりは多いが、每碑三十四行と計算すると、二十七碑に入られる。『洛陽伽藍記』の記する所が實に近いわけである。<sup>②</sup>其の行數は『尙書』は每碑三十四行、『春秋』は

三十二行、每行二十字、三體合せて六十字で、縦横の界線があり、三體毎に一格をなしてゐる。<sup>③</sup>但『尙書』の



第七圖 (Fig.7) 魏石經春秋殘石(直下式)

臯陶謨篇以前は三體直下式をとらず、一格の内で上には古文が列し、下には篆隸二體が雙行をなして並列し

品字式をなし、毎行三十七格、每碑二十六行を容れる。<sup>④</sup>其の書者に就ては、北魏の江式は邯鄲淳の書としたが、胡三省は『資治通鑑注』に既にその誤謬を指摘したし、晉の衛恒の『四體書勢』には「正始中に『三字石經』を立つ、うたゝ淳の法を失す」（晉書衛恒傳

第八圖 (Fig. 8) 魏石經尙書殘石(品字式) — 馬衡跋石 —



による<sup>⑤</sup>)と明言してゐるのは、邯鄲淳の書でない明證である。<sup>⑥</sup>今原石を細かに調べて見ると、楊守敬が四體書勢により衛恒の書と攷證した様に明らかに何人の書と定めることは出来ないけれども、三體が一人の手でないことは斷言出来る。又古文の書體にしても、品字式のものと同下式のものと同じでないから、古文も亦

一人の手でない。此は漢石經の書者が蔡邕一人でないのと同例であつて、或は漢石經の如く書人の姓名を具備したかも知れない。魏が三字石經を立てた時には勿論漢石經が猶存在してゐた。それに三字石經を立てたのは漢石經はみな今文で古文で、ないからである。夫故に古文を上書き、其の讀み難いのを慮つてまた下に篆・隸二體を列したのである。古書の釋文は之に淵源すると云つてもよい。其の變遷殘毀の逕路は漢石經と同一であるが、宋代の殘字は漢石經に較べて更に少い。皇祐年間西曆一〇四九洛陽の蘇望が故宰相王文康の家に拓本を得て石に摹刻したのが八百十九字で、『隸續』に載せる『左傳遺字』は是に相當する。蘇氏の刻は斷片殘缺の者に就て完全の字を取出したので、順序が亂れ、又深く考えずに『左氏傳』と稱し、洪适も亦其儘に之に據つた。<sup>⑦</sup>清の臧琳が『經義雜記』の著に至り、始めてその内から『尙書』の殘字を抜き出した。

また孫星衍の『魏三體石經殘字考』は春秋の殘字を魯諸公に分屬せしめた。<sup>⑧</sup>近時、王靜安の『魏石經考』<sup>⑨</sup>は更に詳細に分析し、『尙書』の大誥・呂刑・文侯之命篇等の六段、『春秋』の宣公・襄公經の七段、『春秋左

氏『桓公傳の一段(但し此段は二十五字の一行直下に止り、石の裂けて一長行をなす理窟がないので眞偽の程疑問である。)に分ち、其字數を計算して五石と定め、作圖して證明し、蘇氏の摹本の順序不同の者が始めて舊に復した。<sup>⑩</sup>胡宗愈の成都西樓に刻した者も亦八百十九字で蘇氏と同一源から出る。現在は二本共に亡び、但其の字が『隸續』に載せられて存するばかりである。清の光緒年間<sup>西曆一八五五頃</sup>洛陽の故城中の龍虎灘から一殘石が出土した。一面に字百十字あり、裏面には字が無い。『尚書』君奭篇の殘字である。民國十二年一月<sup>西曆一九二三年</sup>洛陽朱屹嶠村から一碑を掘出した。僅に上半だけで、一面には『尚書』無逸篇十七行、君奭篇十七行の九百七十八字、又一面には『春秋』僖公二十五行文公(篇題を併せて)七行の八百三十字である。先に出土の君奭篇の殘石は此碑の下方で、文が相連接する。同時にまた出土一石は、一面に『尚書』多士篇の百三十四字、一面に『春秋』文公篇百三字を存する。<sup>⑪</sup>此後にも出た殘石甚だ多く、自分の管見でも『尚書』二百九字(内に品字式のもの九十七字あり)、『春秋』百八十二字、何經か不明のもの三十四字がある。以上前後出

土を合計して二千五百七十六字となる。宋人の見た所と比較して二倍である。<sup>⑫</sup>且つ『尚書』の前の數碑が品字式をなす點などは今迄石經學者の全然知らなかつた所である。

①『西征記』(太平御覽卷五百八十九引)に「國子堂前に列碑あり、南北行し三十五枚なり。之が表裏に刻し、春秋經と尚書の二部、大篆・隸・科斗の三種の字を書す。碑長け八尺、今十八枚存するあり、餘は皆崩る」と。『洛陽伽藍記』卷三に「開陽門御道の東に、漢國子學堂あり、堂前に三種字の石經二十五碑あり。表裏に之を刻し、春秋と尚書の二部を寫し、篆・科斗・隸の三種字を作る。漢右中郎將蔡邕の筆の遺跡なり」と。『隋書』經籍志卷三十二には、三字石經尚書九卷、三字石經尚書五卷、三字石經春秋三卷と尚書に二部ある『舊唐書』經籍志・『新唐書』藝文志には三字石經尚書古篆三卷、三字石經左傳古經十三卷がある。水經穀水注には「魏の正始中また古・篆・隸の三字石經を立て、……之を堂の西に樹つ。……碑石四十八枚」と。

②王國維の『魏石經考二』は馬衡氏が疑問とする『隸續』所收の洛陽蘇望の刊した魏石經遺字の左氏桓公七年、及十七年の傳文の二十六字を眞と認め、左傳が隱公桓公の部分迄刊せられたとするので、『西征記』の三十五碑説を採用してゐる。最近公刊された孫海波氏の『魏三字石經集錄』は第一次の刊石は左傳を除き二十八石なりとの説をとつてゐる。之は馬衡氏の説を襲つたのであつて、現在では馬説の

方が旗色か良いらしい。

⑧この推算は、馬氏は全く王國維の『魏石經經數石數考』學術叢編所收。(觀堂集林卷二十、魏石經考二)に據つてゐる。

④品字式と直下式の區別、前者行數格數の推算も、馬氏は全く王國維の『陳氏に與へて魏石經を論ずる書』(『魏正始石經殘字考』の碑圖の後に附した攷證も同じ)を基礎としてゐる。(圖版第七圖は直下式、第八圖は品字式の例を示す。)馬氏は魏石經の尙書舉陶謨篇以前は品字式で、それ以後は三體直下式と云ふが、最近に至り、山東省立圖書館藏石の如く堯典篇にも直下式のものが見れたので、魏石經は直下式の完全な尙書一部と別に品字式の尙書の前小部のみとの二部の存在することが判明した。

⑤『魏書』卷九十一、江式傳に江式の上疏中に「魏の陳留の邯鄲淳三字石經を建つ」と。

⑥元胡三省は『資治通鑑』に注して、「此碑は正始年中に立つ。漢書に元嘉元年、度尙邯鄲淳に命じて漕戣碑を作らしむ。時に淳已に弱冠なり。元嘉より正始に至るまた九十餘年、或は三字を以つて魏碑となすは是なり。之を邯鄲淳の書す所と云へば非なり」と。『晉書』卷三十六衛恒傳に「魏初の古文を傳へる者は邯鄲淳に出づ。……」に續けて本文がある。三字石經の淳の末流の手になるを難する。

⑦楊守敬『晦明軒稿』魏三體石經殘字跋

⑧『隸續』卷四の魏三體石經左傳遺字は即ち之である。

⑨『魏三體石經殘字考』(石經叢函所收)

⑩王國維は『魏石經考』下(學術叢編卷六)に於て十二段の分

段を試みた。之は後に『王忠愍公遺書』第二集中の『魏石經考』の後に『隸釋所錄魏石經碑圖』として後に附せられてゐる。

⑪『尙書』多士篇は多方篇の誤である。

⑫魏三字石經も亦、馬氏の此の講義稿本の作られた以後の新出土の斷片が極めて夥しい。前に舉げた最近出版の孫海波氏の『魏三字石經集錄』は徐鴻寶及孫壯氏の集拓を主材料として材料を可成り多く收集してゐるが、之でも完全とは云へない。然し孫氏の書に錄する者だけでも馬氏の見るところに比して遙に多數である。

唐石經は文宗開成二年西曆八三七年に刻が出来上つた。鄭

覃が本文を校定し、後漢の故事に準じ太學で石に刻した。①經數は『易』『詩』『周禮』『儀禮』『禮記』『春秋左

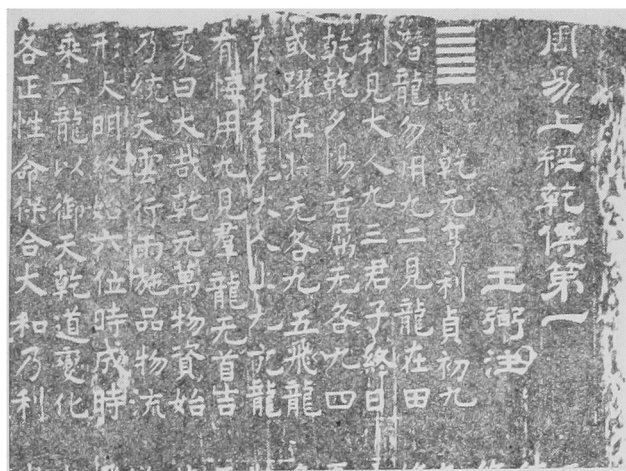
傳』『公羊傳』『穀梁傳』の九經に『孝經』『論語』『爾

雅』を益して十二經とした。②清の賈漢復が『孟子』を補刻して其後に附した。③其卷數石數は『金石萃編』に詳

しいから茲に略する。其の最後の一石には諸經の字數を詳記し、年月と書者刻者校勘者の人名を題してある。④立石以後七十年天祐年間西曆九〇七—九〇九に至つて韓建

が新城を築いた際、之を野に棄てた。朱梁の亂に劉鄩が長安を守るや、その幕下の吏尹玉羽の請により之を車に載せて城に運んで、故の唐尙書省の西隅に置い

た。宋元祐二年西暦一〇八七呂大忠が黎特に命じて府學に遷させた。<sup>⑤</sup>明嘉靖三十四年西暦一五五五の地震により倒れ損じたが、王堯典等が舊文を按じ、其闕字を集め別に小石



第九圖 (Fig.9) 唐開成石經周易拓本 一西安碑林一

に刻して傍に立てたが、誤謬極めて甚しい。表具師が往々王堯典の補字を原文の缺け損じた場所に張り合は

せて完全な文としてゐる。清の顧炎武の校合したのは此の誤つて表装した本に據つたので合はぬ所が多い。<sup>⑥</sup>嚴可均の『唐石經校文』は最も精密を稱せられる。<sup>⑦</sup>歴代の石經は最近の清石經を除いては唐石經が最も完全である。

①『舊唐書』卷十七下、文宗紀に「開成二年冬十月癸卯、宰臣判國子祭酒鄭覃石壁九經一百六十卷を進む」の文がある。その他同書卷一七三、鄭覃傳等を見よ。

②王溥の『唐會要』卷六十六に、大和七年十二月、國子監講論堂の兩廊に石壁の九經並びに孝經・論語・爾雅等あはせて十二經、ともに二百五十九卷を創立せしめたことが記せられてゐる。

③張國淦の『歷代石經考』によると、掖縣張氏の『摹唐石經新拓本十二經』『五經文字』『九經字樣』には清の賈漢復補刻の孟子が附せられてゐるが、石刻でなく木刻であると。

④『金石萃編』卷一百九。

⑤宋元祐二年西安府學に石碑を移した黎持の『京兆府學石經記』には、天祐中韓建の新城を築いてより、六經の石本が野に棄てられ、朱梁の時尹玉羽が長安城尙書省隅に置いたのを、呂大忠が黎持に命じて府學に移した顛末が載せられてゐる。

⑥王鳴盛の『蛾術篇』(金石萃編卷百九所引)に明の趙嗣の『石墨鈎華』卷二の唐刻石經考の王堯典が嘉靖乙卯の震災後舊文を按じて、缺字を集め別に石を建てた條を引き、顧亭林

が補字を原刻に倣めた合裝本に欺かれた誤を指摘してゐる。

⑦『唐石經校文』十卷(四錄堂原刻、又石經彙函所收)

蜀石經は孟蜀の廣政七年西曆九四四宰相母昭裔の建立である。

書者は楊鈞・張紹文・孫逢吉・孫朋吉・周德貞等である。其經數は『周易』『毛詩』『周禮』『儀禮』『禮記』『春秋左傳』『論語』『孝經』『爾雅』の十經である。

宋の田況は『春秋公羊傳』『穀梁傳』を補刻し、皇祐元年西曆一〇四九竣工した。歴代の石經には注が無いが、

孟蜀石經には注があるので、石數は千餘に上り、百七年を経て完成したのである。宋の宣和年間西曆一一二五

席賁が『孟子』を補刻し、乾道年間西曆一一七三晁公武が『古文尚書』を刻した。公武は諸經の異同を校合

して『石經考異』を著して石に刻し、張奐もまた注文の異同を校し『石經注文異』四十卷を出した。<sup>①</sup>石經の、

原石は古くから佚亡したと稱せられてゐる。<sup>②</sup>然し劉喜海の『讀竹汀日記札記』には「聞くならく、乾隆四十

年西曆一七八〇制軍福康安成都城を修す。什邡令任思任孟蜀石經數十片を土中に得たり。字尚ほ完好なり。當時據

つて己の有と爲し、未だ學宮に留置するを肯ぜず。任

氏は貴州の人、官を罷めて後原石を輦して黔中に歸ると。<sup>③</sup>『李慈銘『越縕堂日記甲集』』とあるから、孟蜀石

經の原石が此の世に存在し、或は成都城下に遺留されてゐるのかも知れない。其の拓本流布して前人に著録

されたもの及び余の見聞した者は、『毛詩』卷一後半・卷三、『周禮』卷九・卷十・考工記、『左傳』卷十五・卷

第十圖 (五六一〇) 蜀石經周禮殘字拓本



十六・昭公二年、『公羊』桓公七年より十五年に至る迄、『穀梁』成公元年より二年に至る迄、襄公十八年より十九年迄、二十六年から二十七年迄の諸經の殘字である。此の外湮没して世に現れぬ者もあり、以上に止らぬであらう。<sup>④</sup>



①曾宏父『石刻補敘』（知不足齋叢書所收）卷上、益郡石經に蜀石經に就ての記述がある。開刻、竣工の年次及顛末、書者等皆之に詳しい。田況・席貢・晁公武の補刻、考異等の作も亦之に載せられてゐる。之によると席氏の『孟子』の補刻は宣和五年九月に開始し明年成り、晁氏の『古文尚書』及『石經考異』は乾道六年の作である。張氏が『石經注文考異』四十卷を著したことは王應麟の『玉海』卷四十三による。

②錢太昕は『潛研堂金石文跋尾』卷十一に南宋時代は蜀石經は完全に存したと見え、曾宏父などが之に就て詳述してゐるのに、元明儒者が一言も言及しないから南宋末頃に亡んだのだらうと云つてゐる。

③劉喜海の語は又王懿榮の『蜀石經周禮殘本跋』（劉氏『孟蜀石經殘本』所收）にも引かれてゐる。

④現在傳はつてゐる『蜀石經』拓本は劉體乾により集められ、民國十五年に影印本として出版された。馬衡氏の見た所の本と大體同一らしいが、馬氏の記述と多少の出入がある。『周禮』は馬氏の所見本と同じであるが、左氏傳は卷十五の後半襄公十年より十五年に至る迄と、昭公二年の斷片があつて、卷十六が無い。『公羊傳』は桓公六年より桓公十五年迄で大抵一致するが、『穀梁傳』は卷六文公元年の五行が新に加はつてゐる。

北宋石經は仁宗の立てたもので、慶曆元年西曆一〇四一に着手し『玉海』の「至和二年西曆一〇五五三月、王洙國子監

石經を刊立してより今に到る十五年なりと言ふ」による。嘉祐六年西曆一〇六六（李燾『續資治通鑑長編』の「嘉祐六年三月、篆國子監の石經成るを以て、草澤の章友直に銀百兩絹百疋を賜ふ」と云ふによる）に竣工した。①書者は趙克繼・楊南仲・章友直・邵必・張次立・胡恢等である。字體は二體で、一行は篆書一行は楷書で、

魏石經の每字三體を合せて一格とする者とは相違する。經數は歴史に明文がなく、宋の王應麟の『玉海』に「石經」七十五卷、楊南仲の書。『周易』十、『詩』二十、『書』十三、『春秋』十二、『禮記』二十、皆眞篆二體を具す」と云ひ、又「仁宗國子監に命じて『易』『詩』『書』『周禮』『禮記』『春秋』『孝經』を取り、篆隸二體を爲し、兩楹に刻石する。」と云ふ。③周密の『癸辛雜識』に「泮學は即ち昔時太學の舊址なり。九經の石板、堆積山の如し。一行は篆字、一行は眞字なり」とある。④元李師聖の『修復泮學石經記』には「泮梁もと六經『論語』『孝經』の石本あり。其の殘缺漫剝する者、蓋し當に十の五六のみならず。今の參政公の也先帖木兒一見して之を病む。慨然として完復するを以て己の任となし、數月ならずして復た舊觀に還

へす。奈何せん『孟子』七篇猶闕遺す。亟かに増置せんと欲するも期會拘迫し、有司後圖と爲さんことを請ふ」とある。王應麟は前に五經の卷數を挙げ、後に七經の數を列する。周密はその經がすべて九經であることを云つてその目を舉げない。李師聖は六經の外に『論語』『孝經』あり。『孟子』を闕き、之を増置せんとして果さなかつた言ふ。此等諸説を綜合すれば、北宋石經は實は九經で、その目を舉げれば『易』『詩』『書』『周禮』『禮記』『春秋』『論語』『孝經』『孟子』である。清の葉名澧の『北宋汴學二體石經跋』には宋は『孟子』を經に升して、『論語』『孝經』と共に三小經と爲し、六經と合して九としたと云ひ、宣和年間西曆一一二五席賁が『孟子』を刊して蜀石經の缺を補つたのは多分汴學の石經に模効したのだらうと説いたのは正しい。<sup>⑤</sup>李師聖の闕遺して増置せんと欲すと云つたのは原石が闕遺し、増置し之を補はんとしたのである。清の吳玉搢が吳門の薄自崑の家で『孟子』を見るを得、丁晏が淮安の書店で得た拓本一束中に孟子が有つたのはその明證で、歴史に明文無しとて之を疑ふことは出来ない。<sup>⑥</sup>九經の原石は元代に猶ほ汴學に存した。(明の于

奕正の『天下金石志』には金石經碑を載せて『順天府舊燕城南の金國子學にあり。碑『春秋』『禮記』を刻す。今磨滅完ならず』と云ひ、金には石經を刻するの事なく、志にその書體を云はぬため、之が北宋二體石經か否か判らぬ。清の孫承澤の『春明夢餘錄』に「九經石刻もと汴梁に在り。金人燕に移置す、今復た存せず」と云ふが、何の依據あるか知らぬ。丁良善は金人は『禮記』『春秋』等の石のみ移して他は汴學に留め、或は他所に移したのではないかと稱するが、之は全く證據の無い想像に止る、多少殘缺してゐるが、亦修復せられたこともあり、何時亡佚したか不明である。汪祚はその亡びたのは元末だとする。陳順は其の石が磨滅破砕して完全なものが少く、齋廡の礎石が斷碎で、その上に文字をぼんやり見た。<sup>⑦</sup>朱彝尊は黃河の泥の下に沈んだと云ひ、畢沅は修築の時數瓦として使用したと云ふ。<sup>⑧</sup>李師聖の修復の後、又漸次崩壞して其の破損移轉の逕路が最早辿り得なくなつた。其の殘石の今僅に存するものに『周易』『尚書』が開封(『寰宇訪碑錄』に見える。行數字數は未詳である)にあり、『周禮』卷一と卷五中の數石が陳留にあり、『禮記』檀弓篇の六

十行が開封に中唐篇の五十行が開封東岳廟にあり、『孝經』十一行が開封圖書館にある。拓本の著録せられるものは先づ吳門の薄氏舊藏の四大冊あり。『尚書』『周禮』『禮記』『孟子』が含まれるが現在その存否は判らない。<sup>13</sup> 山陽の丁氏の蒐聚は最も多く、『易』『詩』『書』『周禮』『禮記』『春秋』『孟子』の七經凡そ三千百二十八行、三萬三百餘字（細目は丁晏の『北宋汴學二體石經記』にある）に上り、今は貴池の劉世珩の家に歸した。上虞羅振玉の藏する新舊拓本に『周禮』『禮記』『孝經』の凡そ五百五十餘行があり、吉石齋叢書三四集によつて出版された。<sup>14</sup>

①『玉海』は卷四十三、嘉祐石經の條下の文。『續資治通鑑長編』は卷百九十三。三月とあるは六月の誤。

②書者は『玉海』同卷宋朝石經の條に、楊南仲書とあり、嘉祐石經の條に章友直・張次立が篆書の書者なりと云つてゐる。朱翌『猗覺寮雜記』には「本朝石經は胡恢の書なり」と云ふ。張國淦の『歷代石經考』には他に書者を擧げる。

③『玉海』同卷、宋朝石經の條及び嘉祐石經の條。

④周密『癸辛雜識別集』卷上、（學津討原所收）

⑤『修復汴學石經記』及席貢の言は『經義攷』卷二百九十引く所による。

⑥吳玉搢『金石存』卷五、宋二體石經・周易・尚書殘碑の條

に「皆て四大冊を吳門の薄自昆の家に見る。乃ち尚書・周禮・禮記・孟子の文なり」と云つてゐる。

⑦葉名澧『北宋汴學二體石經跋』（石經藥函所收）による。

⑧『天下金石志』（顧氏金石輿地叢書所收）

⑨丁晏『北宋汴學二體石經記』（石經藥函所收）

⑩汪祚の説は杭世駿『石經考異』卷下の引く所。陳順の言は『經義考』卷二百八十九引く所による。

⑪朱氏の説は『經義考』卷二百八十九にある。畢説は『中州金石記』による。

⑫孫星衍の『寰宇訪碑錄』卷六には河南詳符縣の周易・尚書殘碑の外に陳留縣の周禮殘碑がある。檀弓殘碑は吳式芬の『檀弓錄』及び翁方綱の『宋石經禮記檀弓跋』による。『孝經拓本』は『河南圖書館藏石目』中にある。

⑬註⑧参照。

⑭羅氏は別に民國十二年『北宋二體石經易書詩禮記周禮宋拓殘本』のコロタイプ版を出してゐる。

南宋石經は高宗皇帝の御書で紹興十三年<sup>西曆一四三</sup>九月左僕射秦檜が石に刻して四方に頒布せんと奏請した。

其の經數は『周易』『尚書』『毛詩』『春秋左傳』『論語』

『孟子』であり、字體は楷書で『論語』と『孟子』だけは行楷である。『禮記』の學記・經解・中庸・儒行大

學の五篇は元來は太學石經の内ではない。淳熙四年

西曆一一七七に「光堯石經之閣」を立て石經を奉安した時、知

府趙樞老が採訪摹刻して禮經の闕を補つたものである。<sup>①</sup>諸經合して二百石ある。元初に西蕃僧の楊璉眞伽が諸の石を運んで行宮故址に塔を建てんと謀つたが、杭州の推官申屠致遠が方を盡して争つたので止めた。<sup>②</sup>元末に肅政廉訪使徐炎が府學を改めて西湖書院とし、碑閣ともに廢された。<sup>③</sup>明洪武十二年<sup>西曆一三七九</sup>仁和縣學を書院に移した。宣德元年<sup>西曆一四二六</sup>吳訥が知府盧玉潤に屬して收集して完全な碑・殘碑合せて百片を得て殿後と兩側房とに置いた。次いで天順三年<sup>西曆一四五九</sup>城隅の貢院に縣學を改築した時、石を全部徙されたが、正德十三年<sup>西曆一五一八</sup>宋廷佐が又命じて杭州府學に置いた。<sup>④</sup>清の阮元が『兩浙金石志』を輯めた時には尙ほ八十六石（『周易』二石、『尚書』七石、『毛詩』十石、『中庸』一石、『春秋左傳』四十八石、『論語』七石、『孟子』十一石）あつたが、<sup>⑤</sup>現在また九石（『尚書』一石、『春秋左傳』八石）無くなつた。完全な拓本はもと星子の白鹿書院にあり、宋の朱熹表請して頒つたものである。近年書院が火災にかゝつて此本も灰燼に歸した。

①『玉海』卷四十三、紹興御書石經にその顚末が最も詳細に記せられてゐる。

- ②『元史』卷百七十、申屠致遠傳に見える。  
 ③陳基の『夷白集』西湖書院書目序による。  
 ④此の顚末は『兩浙金石志』卷九に引く所の吳訥の石鼓歌の序及前引の楊一清の文に詳しい。  
 ⑤『兩浙金石志』卷九。

清石經は乾隆五年<sup>西曆一七四〇</sup>に蔣衡が手書して上進し懋勤殿に貯えた本を五十六年<sup>西曆一七九一</sup>に始めて命じて石に刻して太學に立てたのである。其經數は『周易』『尚書』『毛詩』『周禮』『儀禮』『禮記』『春秋左傳』『春秋公羊傳』『春秋穀梁傳』『論語』『孝經』『爾雅』『孟子』の十三經である。その石數は『易』六石、『書』八石、『詩』の序を併せて十三石、『周禮』十五石、『儀禮』十七石、『禮記』二十八石、『左傳』六十石、『公羊』十二石、『穀梁』十一石、『論語』五石、『孝經』一石、『爾雅』三石、『孟子』十石、乾隆五六年の上議と六十年の和珅の表の一石と共に一百九十石である。<sup>①</sup>東西の側房各半分宛藏し西の棟から始り、東の棟に終る。東の棟は北を上にし、東棟は南を上にする。其字體は眞書で碑首には「乾隆御定石經之碑」八字があり篆書で書かれる。每碑兩面に刻され、一面は六列一列三十五行、行十字で、今猶完全で清の故國子監にある。<sup>②</sup>

①『東華續錄』乾隆五十六年十一月上諭による。『清史列傳』蔣衡傳によると蔣衡の書は乾隆三年に完成したと云ふ。

②『歷代石經考』には徐鴻寶氏の言に據つて各經の石數を擧げてゐるが、馬氏と一致し、唯上諭及び表をば擧げず、計百八十九石とする。清石經は故宮博物館長たりし馬衡氏の實地調査の經驗に基づく。

太學に立てない經には、唐に石臺孝經があり、唐玄宗の御注御書で天寶五載西曆七四六に立てられ、今も長安にある。<sup>①</sup>宋に紹興府學の孝經あり熙寧五年西曆一〇七二に立てられた。杜春生の『越中金石記』は謝景初の書と考證した。今も紹興に存する。<sup>②</sup>高宗御書眞草二體孝經は紹興十四年西曆一四四一の立で、後に秦檜の跋があり、今は遂寧にある。<sup>③</sup>（臨安の原刻は已に佚した）。<sup>④</sup>外に二本あり、一は南海、一は陽新にあつて、皆高宗の書である。明には國子監孝經があり、萬曆年間西曆一六一九蔡毅中の立てた所で、今は歴史博物館にある。<sup>⑤</sup>經文の一部を録した者に唐の李陽冰の篆書の『易』謙卦二本、一は當塗、一は蕪湖にある。<sup>⑥</sup>宋の司馬光の書いた『易』家人・艮・損・益・四卦と『禮記』中庸樂記二篇と『左傳』の晏子の語は今杭縣にある。<sup>⑦</sup>（家人卦のみは紹興十九年西曆一〇九一融縣に復刻せられた。張栻の書いた

『論語』問政篇が淳熙十一年西曆一一八四の刻で、今は桂林にある。<sup>⑧</sup>朱熹の書いた『易』繫辭は今常德に存する。

①『寰宇訪碑錄』卷三、『金石萃編』卷八十七、何れも天寶四載九月に繫げてゐる。

②『越中金石記』卷二。

③吳式芬の『金石臚目』卷十六ノ二、四川省潼川府遂寧縣學にあり、凡四碑で今その第二を佚すと云ふ。

④『金石萃編』卷百四十八によると、清の王昶は杭州府學靈星門内の左右壁にあるを見たと云ふ。馬氏がその佚したと云ふのは何時のことであるか知らない。

⑤同書卷十七、廣東省廣州府南海縣の廣州府學大成殿の後にあると。

⑥同書卷十四、湖北省興國州學にある。

⑦『經義考』卷二百九十二、明國子監石刻孝經。

⑧干奕正『天下金石志』に蕪湖の民家にありと云つてゐる。

⑨『金石臚目』卷五に、當塗縣に李陽冰の謙卦爻辭篆書を出し、蕪湖縣に同題あり、縣學明倫堂の壁にあり、翻本なりと云つてゐる。金石萃編卷九十八。

⑩同書卷七、浙江省杭州府の以上の内、家人卦・樂記・中庸は南屏山興教寺にあり、捐卦は南山幽居洞にあり、艮卦は淨慈寺、晏子語は南山太子灣にありと云ふ。

⑪『金石臚目』卷十八、廣西桂林府彈子巖題刻中にある。

⑫同卷十五、湖南省常德府武陵縣の府學明倫堂に朱子の易有大極の一段があるが、明の正統年間の重刻だと。

石經の文字を校正し經に附して行はれたものに唐の張參の『五經文字』唐の玄度の『九經字樣』があり、唐石經の後に附し、今も長安にある。宋には晁公武の『石經攷異』と張奐の『石經注文攷異』があり、『蜀石經』の文字を校正したが惜しい哉石經と俱に亡びて仕舞つた。

其他の書籍の刻石は魏文帝の『典論』が最初に明帝はその先帝の不朽の格言である故に廟門の外と太學に刻したが、正始石經と共に亡びた。唐の顏真卿の書した顏元孫の著『干錄字書』、宋高宗書の『禮部韻略』は吳興の墨妙亭で火災にかゝつた。<sup>①</sup>宋の劉球の『隸韻』、薛尚功の『歷代鐘鼎彝器款識』は最初は石本であるが、今は版本のみあつて石刻は早く亡んだ。<sup>②</sup>石本の今残つてゐるものは、『韓詩外傳』の殘石が滋陽の牛氏に藏せられ、阮元は唐刻と鑑定した。<sup>③</sup>重模本の『干錄字書』は渾南にある。皇象の書の章草『急就篇』を宋の葉夢得が摹した本に宋克が六百十六字を補つたものを、明正統年間一四四九<sup>④</sup>楊政が松江で刻した。<sup>⑤</sup>宋の釋夢英の『設文偏旁字原』(咸平二年西曆九九九)劉敞の『先秦古物記』(嘉祐八年西曆一〇六三)は長安にある。此の外で石本書藉

の流傳するものは頗る少いであらう。

①張鑑『墨妙亭碑目攷』參照。

②薛尚功の著の石本は『石刻補敘』卷上にも見える。その後石本亡んで久しく版本のみ存したが、民國十八年中央研究院歷史語言研究所の徐中舒が内閣大庫檔案の中から宋拓本の殘葉三枚を得て同所收刊第二本第二分に公にした。其後趙萬里によつて發見せられた十六葉を加へ、民國二十一年同所から影印『歷代鐘鼎彝器款識法帖殘本』と題して公刊せられた。

③阮元『山左金石志』卷十三、韓詩外傳殘石參照。

④『金石萃編』卷九十九。

⑤孫星衍『急就篇攷異序』による。

⑥畢阮の『關中金石志』卷一。

正誤 前號「支那金石學概要」四七頁下一九行圭首は竊首の誤。

# 日本寄語 (前六三頁より續く)

無工夫	一孫	揠水	ガシ
怪	發頓且	多堅固	?
死	身大	シンダ	
腫	刺大	(は)レタ	
喚	加右	?	
笑	歪龍	ワラ(ふ)	